

死の支配者と六人のプレイヤー

フォーミラー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

AINZ·WURL·GOWN。それはユグドラシルでトップ10位以内に入るギルド。

41人の異形種で構成されているギルドで悪ギルドとも呼ばれていた。

しかし、それはもう昔の話。今はモモンガを含め7人しか残つておらず、等々ユグドラシルサービス終了日に……。

目

次

プロフィール

第1話 異世界転移

第2話 カルネ村

第3話 陽光聖典

29 10 5 1

プロフィール

オリキヤラ紹介

プレイヤー名：龍牙《リュウカ》

基本レベル：L v 100

種族：竜人、龍人、など

性別：女

職業：ワールドチャンピオン L v 5

修行僧《モンク》 L v 15、

武神《ブシン》 L v 10、

ストライカー L v 5、

六式（極） L v 5、など

カルマ値：善 100

外見：ゆらぎ壯の幽奈さんに出でくる。

魔境院 逢牙《まきよういん おうが》 イメージ

性格：好戦的で仲間思い、ギルドでは姉御的存在である。武人建御
雷と仲が良い、ワールドチャンピオン同士である。たつち・みーとは
あまり馬が合わない。ちなみにシヨタコンである。

プレイヤー名：夜叉丸

基本レベル：L v 100

種族：妖狐、九尾

性別：男

職業：ワールドチャンピオン L v 5

大剣豪 L v 5

剣聖 L v 10

気マスター L v 10

侍 L v 10

カルマ値：善 200

外見：犬夜叉の父似ていて、鎧も同じ。

唯一違うところは、狐の耳があること。

性格：好戦的で強いプレイヤーがおつたらPVPを持ち掛けてたほど。戦いが好きだった。

たつち・みーと同じワールドチャンピオン同士で仲がいい。たつち・みーとウルベルトが喧嘩するといつも止めている。そんなギルメンからはスツトパーと呼ばれていた。

実力はたつち・みーと同じぐらい強く見た目が侍に近いため武人建御雷とも仲が良かつた。

プレイヤー名：ハーデス

基本レベル：Lv100

種族：死神『グリムリーパー』

死神王『グリムリーパーロード』

性別：男

職業：ネクロマンサー、

チヨーセン・オブ・アンデット各Lv5

カオスソウルイーターラン Lv10など

カルマ値：極悪 -500

外見：ハイスクールDDに出てくる。ハーデスをイメージ

性格：歳はモモンガと同じ年だが、プレイしている時は年寄り口調になる。モモンガとは仲が良く同じくたつち・みーを尊敬し憧れてい る。けど、ペロロンチーノはエロをよく語ることが多いので少し苦 手。

プレイヤー名：アゼルト・シーカス

基本レベル：Lv100

種族：天使『エンジェル』

熾天使『セラフ』

墮天使『ダウンエンジェル』

性別：男

職業：機械『マキアス』 Lv5、

科学者 Lv15、

生産職系 Lv5、

修行僧 《モンク》 Lv1、など

カルマ値：悪 Lv200

外見：ハイスクールDDに出てくる。アザゼルで青年風をイメージ
性格・研究好きで、悪戯好きで研究で作った。アイテムを相手ギル
ドに実験をしに行つたりする。運営からのシステムを少し手伝つて
いた。ユグドラシルでの全ての天使シリーズの父である。けど、運
営にシステムを譲った。理由はすべての天使には裏コードがあり、悪
戯で使えそうだから。それを運営は知らない。

プレイヤー名：ゼクス

基本レベル：Lv100

種族：小悪魔 《インプ》

悪魔公 《デーモンロード》

悪魔王 《デヴィルロード》

性別：男

職業：エレメンタルファイブ Lv10、

滅び 《ディストラクション》 Lv5、

剣士 Lv1、など

カルマ値：極悪 Lv500

外見：紅の髪でショウウトヘアである。背はデミウルゴスぐらい、
面には4つ穴が開いており、外すと4つ目服装は黒の長袖、手袋、ズボン、ブーツ、黒のローブは頭まで隠している。

プレイヤー名：ニルバ

基本レベル：Lv100

種族：吸血鬼 《バンパイア》

吸血鬼王 《バンパイアロード》

性別：男

職業：ガンナー Lv15、

スナイパー Lv10、

隠密 L v5、

マキアス L v1、など

カルマ値：邪悪 ー400

外見：銀髪で、背はシャルティアと同じぐらいの少年に近い腰に二丁拳銃で右が「銀狼の銃」《フェンリル》左が「紅龍の銃」《クリムゾン》左目は眼帯をしており、目に神器アイテムが埋め込んである。

ベルトには様々な付与がしてある銃の弾とマジックアイテム

性格：冷静で無表情だけど普通に喋れる。アゼルトは気が合う、メイン武装は二丁拳銃だけど長距離ライフルも扱えて、狙撃も得意。超々遠距離から敵を一撃で仕留めることもでき、様々な付与をした弾で見方を援護やサポートしている。龍牙にはよく言い寄られて苦手だけど仲間思いである。

第1話 異世界転移

DMMO—RPG。

それは仮想世界で現実にいるかのどく遊べる体験型ゲーム

その中で燐然と煌くゲーム

それがYGGDRASL『ユグドラシル』

しかし、それはもう十数年前のことである。

ここは悪と呼ばれているギルド、AINZ·ウール·ゴウンそこで7人のプレイヤーたちはユグドラシルサービス終了までナザリック地下大墳墓で過ごしていた。

ナザリック地下大墳墓第9階層玉座の間

アゼルト「モモンガさん、今帰りました。」

モモンガ「あ、アゼルトさんもう帰つてきたんですか？早いですね。」

アゼルト「いや、こつちは思いのほか少なかつたみたいので早く帰つてきました。」

モモンガ「そうですか。何個手に入れましたか？あ、それと龍牙さんとハーデスさんはもう少しで帰つてきますよ。」

アゼルト「そうですか。えと手に入つたのが5個だけでした。」

モモンガ「いやいやいや、それだけでも十分ですよ。だいぶ、感覚麻痺してきましたね。」

アゼルト「ハハハハ、確かに今まで、一個手に入れるだけで凄かつたのに、今だとあちこち安値ワンコインで売つていますから。「ワールドアイテム」

モモンガ「ハハ、そうですね。あ、それとゼクスさんは15個で、二ルバさんは10個で、夜叉丸さんはアゼルトさんと同じ5個でした。それにゼクスさんは二十の内の1つを手に入れて宝物殿に保管しました。」

アゼルト「え、マジですか！ゼクスの野郎羨ましい！」

ユグドラシルではワールドアイテムは一つ持っているだけで知名度大きく高くなる。けどユグドラシルに飽きたプレイヤーの多くは売りに出しているので、こんなにも多く手に入るのである。

それからしばらくすると龍牙とハーデスが帰ってきた。

龍牙「帰ってきたぞ、ギルド長それとアゼルト」

ハーデス「ファファファ、帰りましたぞギルド長」

モモンガ「龍牙さんハーデスさんお帰りなさい。どうでした収穫ありました？」

アゼルト「俺は、ついでかよ。姉さん」

龍牙とハーデスはそんな風に言つてモモンガは収穫を聞いて、アゼルトは少しあきれていた。

龍牙「まあ、そういうなアゼルト、それと大収穫でしたよ！モモンガさん二十の内の一つ手に入りました。【ワールドセイヴァー】です。」

ハーデス「ファファファ、それが手に入った時は驚ろいてしもうたわい。」

モモンガ「え、マジですか。」

アゼルト「ほう、それはもう少し早く手に入っていたら、アイツの強化に使えたのになあ～」

楽しそうに龍牙がそう言つて、ハーデスは顎に手を当ていい、モモンガは驚き、アゼルトはニヤッとした顔文字を出して言つた。

龍牙「そう言うなアゼルト、それにもうすぐサービス終了だし。」

ハーデス「そうじやの～」

モモンガ「そうですね～、皆さんと一緒に遊んでいたのが一番楽しかつたです。」

アゼルト「オイオイ、辛気臭くなつてどうするのよ。最後くらい笑つて終わろうよ。」

龍牙がアゼルトにそんな風に言つて、ハーデスとモモンガが少し暗くなつたが、アゼルトが笑つてみんなを励ました。それから龍牙とハーデスはワールドアイテムを宝物殿に置いてくるのに一時退出行き、アゼルトもやりたいことあるので研究室に向かつて行つた。そしてモモンガは一人玉座に腰を掛けっていた。手にはギルドの象徴スタツフ・オブ・AINZ・ウール・ゴウンを持つておつた。隣にはタブラ・スマラグディナが作ったNPC守護者統括アルベルトがあり、その後ろにプレアデスのリーダーセバス・チャンと副リーダーユリ・アルフアとその姉妹たちがおつた。

モモンガ「(アルベドの設定つてどんなどつたけ、ちょっと見てみよ)長つが、タブラさん設定に拘る人だつたなあ」

『ちなみにビッチである』最後の文にそう書かれていた。

モモンガ「ビッチつて、そう言えばギャップ萌えだつたなあ、あの
人、けどこれは酷い。(そうだなあ『モモンガを愛している』うはゝ恥
ずかしい、これ誰かに見られたら笑われる。)」

そんなことをしていたら、もう直ぐユグドラシルサービス終了10分前になつていた。

モモンガ「最後はみんなと一緒に終わりたいなあ、(伝言皆さんそ
ろそろサービス終了10分前なので玉座に集まつてください)」

アゼルト「(了解。)」

龍牙「(わかった。)」

夜叉丸「(了解。)」

ハーデス「(わかりました。)」

ゼクス「(直ぐ行く。)」

ニルバ「(OK。)」

みんな違つた返事で応答した。

そして2～3分してみんなが玉座に着いて、左右に立つた。

アゼルト「いや長いようで短いような日々でした。」

龍牙「確かに」

夜叉丸「ああ、そうだなあ」

ハーデス「うむ、そうじやの？」

ニルバ「僕も寂しいです。」

ゼクス「だが、ここで最後にたくさんワールドアイテムを手に入れたのは、我々AINズ・ウール・ゴウンの偉業だな。モモンガさん」

モモンガ「そうですね、どれぐらい集めました？」

アゼルト「大体100種類かなあ、まあ半分ぐらいだな。」

龍牙「マジかよ、そんなに集まっていたのかよ。」

夜叉丸「宝物殿に行つたがすごかつたぞ！」

ハーデス「確かに、我々AINズ・ウール・ゴウンの偉業だの？」

ニルバ「すごいなあ、そこまで集めたギルドはユグドラシル史上僕たちだけだな。」

ゼクス「フツ、そうだなギルド長が最後まで残つてくれたからできたな。ありがとうございます。」

モモンガ「なつ、そんなに大したとではありませんよ。ゼクスさん、みんなさんが居てくれたからできた偉業です。だからみんなの偉業です。」

そうこうしている内に等々ユグドラシルサービス終了が近づいてきた。

アゼルト「もうそろそろ終わりか近づいてきたので、しめはモモンガさんにしてもらいましょ。魔王風に」

龍牙「それは賛成だ。」

夜叉丸「ははは、いいね！」

ハーデス「わしもギルド長にしめをしてもらいたいの？」

ニルバ「僕も賛成です。」

ゼクス「同じく。」

モモンガ「ええ自分でですか。少し恥ずかしいですけど……わかりました。ギルド長として最後の仕事をしましよう。」

アゼルト「おう、頼みますよ。ギルド長」

龍牙「最後なのでびしと決めろよ。ギルド長」

夜叉丸「カツコよく決めてください。ギルド長」

ハーデス「頑張るじやぞ、ギルド長」

ニルバ「今までありがとうございました。ギルド長」

ゼクス「あなたとみんなと過ごした時間は楽しかつたです。ギルド

長」

モモンガが玉座から立ち。

モモンガ「うむ、では聞け我が友たちよユグドラシルはもうじき消える。だが、我々AINZ・ウール・ゴウンは絶対の不变である。」

そして、モモンガが一パックにおいて、

モモンガ「AINZ・ウール・ゴウンに榮光あれ。」

皆『AINZ・ウール・ゴウンに榮光あれ!!!』

そしてユグドラシルは終了した……はずだつたが、なぜか時計を見ると延長してた。

モモンガ「え? 何コレ、サーバーダウンが延期になつた?」

アゼルト「はあー、マジかよクソ運営、雰囲気ぶち壊しやがつて」

龍牙「ちつ、あのクソども」

夜叉丸「はあー、最後ぐらいビシツと決めさせろよ。」

ハーデス「まつたくだの、クソだクソだと思つていたここまでと

はのく」

ニルバ「ほんと、僕も久しぶりにキレてるよ。」

ゼクス「今すぐに滅つしたい。」

みんなが運営に向けて文句言つているところで、誰も知らない声がした。

???「どうかなさいましたでしようか。」

みんなが一斉振り向くとNPCのアルベドがしゃべつていた。みんな同時に、

『え』と言つた。

第2話 カルネ村

皆『え』

一瞬皆は固まつてしまつた。それもそうだ。いきなりN P Cが喋つたのだから。アルベドだけでなく、その後ろにおけるセバスたちも動いていた。

モモンガ「（え、何で動いて喋つているの？何か異常事態が起こつているのか。それなら確認するか。）セバス。」

セバス「はっ」

モモンガ「ナザリツク地下大墳墓から出て、半径一キロ内の周辺地理を確かめろ。それと知性ある生き物にあつたら、交渉してここに付けてこい。プレアデスたちは9階層に上がつて侵入者が入つて来ないかを見張れ。」

セバス「はっ、畏りました。モモンガ様」

ユリ「畏りました。モモンガ様」

セバスとユリたちは頷いて退出していった。アルベドは言うと、

モモンガ「アルベドには、一時間に階層守護者たちを第六階層の出口ツセオに集めるように。」

アルベド「畏りました。モモンガ様」

そう言つてアルベドも退出していった。それから少しの静寂の後皆が一斉に喋つてきた。

アゼルト「モモンガさん！どうしたんですか。そんな冷静に話して。」

龍牙「ああ、いきなりだつたなあ、しかし、N P Cたちが喋るとは一体何が起きている。と言うか何で私は表情ができる？」

夜叉丸「もしかして、俺たちのN P C感情持つたり、喋つたりするのか？」

ハーデス「わしは、骸骨の顔になつていいるし、それに感情が一定以上高ぶり過ぎると気持ちが沈静化されるの。だから冷静に物事が判断できたのだろう」

ニルバ「本当に何が起こつたのでしょうか？」

ゼクス「考えられるとしたら、ナザリック地下大墳墓」と異世界に転移したのではないか？」

モモンガ「その考えが、一番と思います。それから皆さんがどうします？私は六階層にいって魔法を確かめにいきますが」

皆何が起きたか分からず戸惑っていたが、モモンガが冷静な判断で落ち着いて、気を取り戻した。それから皆、自分のNPCのことが気になつたのでそつちを優先した。

『アゼルト side』

アゼルト「あゝ、いきなり何が起きたんだまつたく。まあ、まずは自分の研究所と研究室、NPCの確認だな。あと八階層も見に行かないと。」

そう言つて研究所に付きいつも使つている研究室にはいた。そこには容器に入つた脳みそが剥き出しの大型生物が8体入つており、そこの近くに椅子に座つてゐる。一人のハゲで丸い眼鏡と髭をはやし医者の白いコートを着た男がおつた。

アゼルト「よおゝ、ドクターなんか変わりないか、他の脳無で上位から下位は無事か、それと最上級に異常とかないか？」

ドクター「おう、アゼルトさま、特に変わつたことはありません。上位から下位にも問題はございません。ハイエンドたちにも問題はありません。」

ドクター、アゼルトの作ったNPC特にストック、生産、復元に特化したNPC、戦闘能力は皆無だが、アゼルトの研究のサポートをしていて、助手みたいな立ち位置。

アゼルト「そうか、それは良かつたハイエンドは作るのに手間だからなあ、あ、それと突然変異^{ミューテーション}は無事か？」

ドクター「もちろん、ご無事です。あれは特に丁寧に保存しています。」

アゼルト「それは良かつた。あれは名前の通り、突然変異だから替えがきかないからなあ。今はナザリックが別の世界に転移したかもしれないから、異常がないかを見て回つていいんだよ」

ドクター「そうでしたかあ、それでは他にも見て回るのですか？」
アゼルト「ああ、後はサウンドウェーブのところと、八階層を見て回るつもりだ。（まあ、それだけでなく、秘匿階層にも行くけどなあ。あそこはNPCでもたつた数人だけしか知らないし、ドクターにもその内教えようかなあ）。アレ、完成を早めることができると、「ワールドセイヴァー」を組み込むつもりだし中々面白くなつてきたぞお（ニヤツ）」

ドクター「まゝた、ニヤけておりますぞ。どのようなことをお考えで？」

アゼルト「ハハハ、そうか、まあ、その内教えるよ。今は考え中だ。それじゃあ、後頼んだぞ。」

ドクター「はい、畏まりました。」

そう言つてアゼルトは出ていつて、サウンドウェーブのいる情報解析室にいった。

アゼルト「よおー、サウンドウェーブ」そういうとサウンドウェーブはすぐに膝まついた。

サウンドウェーブ見たまんま、ロボットである。忠誠心が高い。顔は殆どがバイザーで占めていて、表情は読めず無口で意思疎通するときは、録音した声で話すか首を縦化横に振る。腕は飛行機の羽みたんな形であつた。情報収集能力特化である。主に超小型の虫ロボットを飛ばして各地から情報を得る。戦闘能力はデス・ナイトぐらいだった余裕で倒せる。アゼルトが最も重宝しているNPCである。

アゼルト「一々、膝まつかなくていいよ。それで外の状況分かる？」
サウンドウェーブ「」コク

アゼルト「そうか、一様セバスたちが帰つてきて報告したら再開して、ただしまだ魔法を使つての情報収集はやめてけ、超小型の虫口ボットを使つて再開しな。」

サウンドウェーブ「」コク

アゼルト「よし、じやあ俺は第八階層にあるから、何かあつたら連絡よろしく。」

そう言つて第八階層に向かつていつた。そこにはアゼルトが作ったNPCで、とても凶暴な奴がいる。

それはあまりにも危険で封印している。NPCその名もサマエル【龍喰者】ドラゴン・イーター『ドラゴン・イーター』の異名を持っている。対ドラゴン殲滅特化に作ったNPC。けど、その力の代償に理性が少ししかなく、敵味方の区別しかできないが、ナザリックに属しているドラゴンには襲わないように理性を保つていても危険なので封印している。血だけでも協力でドラゴン種に一番の天敵である。そしてアゼルトは軽くサマエルを見て、ナザリック秘匿階層へと向かつた。

ナザリック秘匿階層そこを知つているのは、ギルドメンバーだけで、NPCでそこ知つてているのは数人しかしない。そこには、数百メートルを超えるバケモノが作られていて、七つの首があり、ひとつひとつが全て異なる世物の形である。獅子や豹、熊、龍、など統一感がなく、体のつくりはあらゆる生物の特徴を有していく、階層全体から伸びている無数のケーブルが獸と繋がっている。

そのバケモノの名が【黙示録の皇獣666】アポカリプティック・ビーストライヘキサである。

そのバケモノのすぐ下にアゼルトが作業をしていた。

アゼルト「後は、こいつに、【ワールドセイヴァー】を組み込ば、攻撃力が無限上昇するぞ。ハハハ、やばいなあ、今ででも十分バケモノなのに、また、バケモノになつていくなあ。」

アゼルト「でもやつぱ、【傾城傾国】で精神支配をしないといけないかなあ。けど、こいつにワールドアイテム聞くのかが不安要素だなあ。効果が効くのだったら、御の字だし、聞かなかつたら、ギルドが崩壊するときに、制御なしの大暴れさせればいいしなあ。うん、そうしよう。」

アゼルト「さあて、確認終わつたし、何しようかなあ。つてもう4日も立つて。まじかよ～ちよつとのつもりが。お、すみません。モモンガさん、どうしましたか。」

やることやつて、暇になつたと思つたら、4日も立つていた。そんな驚いているところに、アゼルトにモモンガから伝言スッセージが来た。

『龍牙 side』

ここは、第四階層、地底湖そこには戦略級攻城ゴーレム、ガルガンチュアと、古の破壊兵器ゴーレム、ゴクマゴクが湖の底に沈められていた。

そしてもう一つ大きく和風の城が建っていた。中は、まるで迷宮みたいになつていて、上下右左が無茶苦茶である。こここの城を無限城と呼ばれている。

龍牙「鳴女、黒死牟を呼べ。」

龍牙がそう言うと、一つ目の女、鳴女が琵琶をべんと鳴らしたら、目の前に六つの目をした侍が現れて、膝まついた。

黒死牟「はつ……及びで……しようか……棟梁。」

龍牙「(やはり、動くし、喋るのか。) 黒死牟、今ナザリックは別の世界の地へと転移してしまつた。今は情報収集をしている。必要となつたら、お前たち十鬼将の力がいる用になる。その間は待機だ。」

黒死牟「はつ、して、棟梁の護衛は如何にしますか?」

龍牙「お前と童磨の予定だ。他に希望する者がいたら、お前たちと

戦つて勝つことだ戦いは無限城の深奥でするように、殺しは禁止、相手に「参った」か気絶させることだ。」

黒死牟「はつ……わかりました。」

ベベんと琵琶の音が鳴つて黒死牟は消えた。

龍牙「さて、宝物殿で私専用の【ワールドアイテム】取りに行くか。」

ここは、宝物殿、ここには『ブラッド・オブ・ヨルムンガルド』と言う猛毒が室内に発生していて、常に空気が汚染されているが、龍牙は毒の完全耐性を持つており、気にならない。そして、龍牙は扉の前に立ち

龍牙「かくて汝、全世界の栄光を我がものとし、暗きものは全て汝より離れ去るだろう」

そう言うと、扉が開き進んでいくと、龍牙とは、少し違うナチスドイツの服を着ているドッペルゲンガーと、肌は青白いく、首には黒のマフラーをして、胸元は見え、黒のミニスカートと膝まで長いブーツを履いている女性のデュラハンがある。ドッペルゲンガーの方は、モンガが作ったNPC、パンドラズ・アクター。デュラハンの方は、ゼクスの作つたNPC、メイ・リリア

パンドラズ「ようこそおいで下しました。至高の四十一人が一人、
龍牙さま。」

メイ「お待ちしております。武を極めし至高の御方。龍牙さま。」

パンドラズ・メイ「今日はどのようなご用件でしようか?」

龍牙「(うわゝこれはきついなあゝ、まんま黒歴史やん、しかも、動いてるし、喋つてゐるから。あの二人一緒に見たら、恥ずかしさのあまり、顔合わせて暮れないと思うなあゝ)ああ、私専用のワールドアイテムを取りに来た【超神の勾玉】だ。用意できるか。」

パンドラズ「はつ、少々お待ちください。」

そう、敬礼して奥へといき、しばらくすると、小さな箱を持つてきた。

龍牙「ほおー、そんなに複数の盗難防止魔法が一つの箱にかけてるなあ。」

パンドラズ「はい、ワールドアイテムなのでこれぐらいが良いと思いまして、」

龍牙「それもそうだな。じゃあ貰いぞ。」

パンドラズ「はい、どうぞこちらを。」

そう言つて、結婚指輪を渡すみたいな開け方をして、中から翡翠色の勾玉が出し自分の首にかけて服の中にいれた。

ワールドアイテム【超神の勾玉】は、龍牙専用のワールドアイテムで、1日に3回まで使うことができるアイテム。その効果がH.P.、M.P.、スキル、超位魔法のリキヤストタイムすら全回復することができ。ワールドアイテムである。実際に超位魔法のリキヤストタイムは回復することはできないがこのアイテムはそれが可能である。実質、超位魔法を三回連続で使うことできるのようなものなので、二十の内の一つである。

龍牙「よしこれでいいか。それじやなあお前ら。(さて、これからどうしようかなあ)」

パンドラズ「はつ、置きお付けて。」

メイ「置きお付けて。」

そう言つて、宝物殿から去つた。

風の城があり、門前には鎧武者の兵が立っていた。

鎧武者は自動でPOPする。Lv40のモンスターで弱いが、一人一人の武装を変えることができ、戦術の幅が広く夜叉丸は譲歩している。

兵「おかえりなさいませ。殿。」

夜叉丸「（殿つて、俺のこと？はあ～先が思いやられるなあ～ここは冷静にして）ああ、八皇断罪刃の立華 凜を居間まで呼ぶように。」

兵「はっ、承知しました。」

八皇断罪刃は夜叉丸の作ったNPCであり、全員がLv100で、夜叉丸を筆頭に様々な陣形や戦術を組むことが得意で、個としての実力も強いが連携して戦う方が一番強く、ナザリックでは特攻部隊とも呼ばれている。

そう言つて兵は動き、夜叉丸は一人居間まで向かって、座布団に座り待つていると、鎧甲冑を着た者。立華 凜が来た。

立華 凜は、夜叉丸の作ったLv100のNPCで断罪刃では前衛のタンクを担う。

種族は鬼人、重装甲の鎧を着ており、背中の筒には様々な武器があり、それを使いこなすことができる。

立華「及びでしようか。殿」

夜叉丸「ああ、少し話がある。その前にナザリックがどこにあるか知つているか？」

立華「？毒の沼地のはずでは？」

夜叉丸「普通はな、今はナザリックが原因不明の地に転移したかもしれない。今セバスが外を見にいつていて。だから、皆にこのことを言つておけ。」

立華「はっ、承知しました。」

夜叉丸「ああ、それと俺もひさしぶりに戦いたい。宝物殿から俺専

用武器を取つてくる。八皇断罪刃全員、地下道場まで来るようだ。

立華「はつ。」

そう言つて、立華が立ち去つた後に指輪のリング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンで宝物殿で着いて、パンドラズ・アクターとメイ・リアを見て少し引いた。

そして、パンドラズ・アクターにたので夜叉丸の専用武器の刀を持つてきてもらつた。

夜叉丸「おお、いつ見てもいなあ」

俺が持つてているのは紅色の刀身をした刀、紅桜

そして、もう一刀が、炎の刀、流刃若火である。

夜叉丸は二本の刀を左腰にこさえた。

元々持つてた刀は、鉄碎牙を含めて3本腰にある状態

そして、夜叉丸は宝物殿をでて城に戻つて、断罪刃に相手をしてもらつた。連携が上手く自分の作ったN.P.C.であるのに、中々苦戦した。

『ハーデス side』

第八階層、冥府軍駐屯地、ここは、ハーデスが作つた死神『グリムリーパー』が駐在している。最上級死神10人、上級20体、中級500体、下級3000体の軍隊である。ただし作つたのが最上級の10人で後は自動でPOPする死神『グリムリーパー』で既定の数が上級20体、中級500体、下級3000体である。

普通、自動POPは、Lv30以下しかPOPしないのだが、ここ冥府軍の駐屯地ではLv60以下編成できる。しかし、POP数は規定人数を達したらPOPしないが数を減つたら駐屯地で自動POPする。

最上級、Lv100、2体、他Lv95
上級、Lv60~50

中級、LV49～30

下級、LV29

ハーデス「タナトス、プルート居るか？」

タナトス・プルート「はつ、お呼びでしようか。ハーデスさま」

ハーデス「うむ、冥府軍に変わった異変はないか？」

タナトス「はつ、特に変わったことは、ありません。」

プルート「我々も含め、全ての死神《グリムリーパー》に異常はありません。」

ハーデスの返答に答えた。二人の死神、この2人は最もハーデスが重宝している。NPCである。他の8人死神もハーデスが作った。タナトスは、戦闘能力が高く鎌を扱えて技術は、ハーデス並みで、だけど魔法は耐性は高いが、扱う魔法の数は他の8人より少ないが、指揮官系の職業持つており、冥府軍のリーダーを任せておる。、プルートは鎌の扱いは他の8人より低いが、魔法によるサポートや、攻撃に使う魔法はハーデスに負けづ劣らずであり、副リーダーを任せている。

ハーデス「うむ、今ナザリックは、原因不明の事態が起こつており、今ギルド長が原因を確かめている。次のギルド長の指示があるまで、わしもここで防衛に当たる。」

タナトス・プルート「は、畏まりました。」

ハーデス「一様、わしの部屋で第八階層を監視し、お前たちに指示をする。異常がおきたら、すぐに動けるように。(こ、これで一人になる。つ、疲れたあ、アンデットなのに。)」

タナトス・プルート「はつ」

こうして、ハーデスは数日、自分の部屋に引き込まつた。

『ニルバ sid e』

ここはアゼルトの研究所の銃武器庫にある。そこには、様々な銃火

器が置いてあつたそこでニルバは、自分の専用のライフル銃【NSR G—666】を手入れしてた。このライフルはアゼルトに頼んで自分専用にワールドアイテムを使って作ってくれた。ライフル銃。使つたワールドアイテムは【グングニル】と呼ばれる槍で、その効果が一度投槍したら相手の防御魔法や盾、相手の防御力を突破して特大ダメージ槍で与え、転移魔法で遠く逃げても持ち主が指名している限りどこまでも追尾し、相手を貫くまで追い続ける。それをライフル銃に改造した。グングニルとちょっと違うのが相手を指名でなく目視してだけで、セットした弾丸は、グングニルの効果のまま、防御魔法や盾、相手の防御力なども無意味、相手を貫くまでどこまで追い続ける。狙撃手にとつては、理想の武器である。

ニルバ「さてと、次はどの銃を使おつかなあ」

手入れが終わつて、それぞれ銃を使つて試し打ちしているところにニルバを呼ぶ声がした。

??? 「ニルバ様、失礼いたします。」

ニルバ「ん? どうしたの? 黄泉。」

ニルバを呼んだ男、その男はニルバに作られたNPCで、種族はアンドゥット。剣術の達人で、龍牙のところの黒死牟とは互角の強さでコミュニケーションスキルにも負けない強さ。シャルティアにアプローチされるいの主人の気持ちが良くわかる。服装は龍牙と同じ軍服で男バージョン。左腰に愛刀の赫黒刀”炎夜”を下げている。

黄泉「はつ、龍牙さまがお見えに。」

ニルバ「えへ、今すぐお引き取り願え。」

龍牙「そう言うなよお、ニルバ!」

そう言つてゐる間に入つてきた。

ニルバ「僕は今、銃の試し打ちをしているんだよ。ほつとつけ。」

龍牙「やっぱカワイイぜ」ギュウウウウ

ニルバがそう言つてニルバをギュウウウとニルバを抱きしめたい。
ニルバはウンザリしていた。

ニルバ「(はあ)(＊、△)、この人とぶくぶく茶釜さんに遊ばれていたな。茶釜さんなんて、男の娘に仕様としてことがあつたなあ。嫌な思い出だ。まあ、今は龍牙の胸にダイブして、いい感じだしいいとするか。)」

『ゼクス side』

第八階層、黒色軍^{ブラックナンバーズ}駐屯地、丁度、冥府軍とは反対側である。ブラックナンバーズは、ゼクスの作った軍で、ナザリック内で、最強の軍である。ユグドラシル時代では、1500人のプレイヤーを第八階層の「あれら」で全滅させた後、報復として、自分とブラックナンバーズだけで、1500人のプレイヤーたちのホームギルドを破壊、壊滅、殲滅させたことがあり、ほとんどのプレイヤーは泣いてやめたと聞いた。駐屯地の門前で、黒髪に赤いメッシュと金メッシュが二本、掛かつており、執事の服を着ている。男性がある。ブラックナンバーズの指揮官ディアブロが立っていた。ディアブロは、魔法と多彩なスキルを持つており、職業では、指揮官系で、修行僧^{モンク}もある。ゼクスの一番の右腕で、忠誠心が非常に高い。デミウルゴスと拷問の意見交換などをしているので、仲が良くバーで一緒に飲むこともある。

ディアブロ「お帰りなさいませ。ゼクス様。」

ゼクス「ああ、丁度いい。ディアブロ俺について来い。少しナザリックの外を見に行く。」

ディアブロ「はつ、「

そう言つて、第一階層付墳墓近くでモモンガさんとデミウルゴスが

向かい合っているところに偶然、出会った。

ゼクス「モモンガさん、どうしたんですかこんな。ところで、しかも、フルプレートを着て。」

モモンガ「ゼクスさん！、いや、これはうそそのう。」

ゼクス「（まあ、何となくわかるが、しかたないよ。）一緒に外に行きませんか？」

デミウルゴス「なつ、お、御方を護衛も付けずに行かれなさるのでですか。」

ゼクス「心配なら、ついて来ていいぞ。なあ、モモンガさん。」

モモンガ「ああ、デミウルゴス私の護衛頼む。」

デミウルゴス「私の我が儘を受け入れていただき、感謝いたします。」

モモンガ様。」

モモンガ「ゼクスさんには、デイアブロか。」

ゼクス「じゃあ、外に行きますか。」

そして、外に出てモモンガは飛行^{フライ}の魔法が掛かつたネックレスで、空を飛び、ゼクスとデイアブロは悪魔の翼を広げて飛び、デミウルゴスはカエルの顔と翼を生やして飛んだ。上空まで上がつて軽い雑談をした後に、モモンガが、

モモンガ「世界征服してみるのも面白そうですね。」

ゼクス「ははっ、いいですね。それ、他のみなさんと今後のことを見て踏まえて話し合いますか。」

モモンガ「ええ、そうしましょ。」

二人はそんな話をして、ナザリツクに帰還した。

数日後、モモンガ一人座つて遠隔視^{ミラー・オブ・リモート・ビューリング}の鏡操つていた。そこには、村が騎士に襲われている。光景だつた。

セバス「どうなさいますか？」

モモンガ「見捨てる。助けに行く価値などない。」

セバス「畏りました。」

そうセバスに言つた途端、セバスの後ろにたつち・みーさんの面影が出て、かつて自分がPKされてときことを思い出し。

モモンガ「(たつちさん、貴方の恩をここで返します。) セバス、私はこの村へ行き助けに行く。後詰めの準備をしておけ、伝言(メッセージ)アゼルトさん聞こえますか?」

アゼルト「(お、すみません。モモンガさん、研究に夢中になつて、どうしましたか。)」

モモンガ「(いや、トライヘキサの事でしよう。気にしませんよ。それより村が襲われてるところ見つけたので、助けに行きます。アゼルトさんはどうですか。)」

アゼルト「(お、それはいいですね。俺も行きます。他の人はどうしますか?)」

モモンガ「(いいえ、アゼルトさんと一緒に行こうかと。)」

アゼルト「(わかりました。それでは、モモンガさんの転移門で行きましょう。一様、嫉妬マスクをしていった方がいいですよ。モモンガさん。アンデットですから。怖がられるかもしません。一様、自分も別の仮面をつけていきます。)」

モモンガ「(わかりました。)」

そして、伝言の魔法がを切つて、少しして、アゼルトがきた。アゼルトの仮面は真っ白なところに睨んだ感じの目で部分には赤と青のガラスがはめ込んでいる。仮面であつた。

モモンガ「それでは、行きましょうか。転移門」

村では、騎士たちに住民が殺されていた。そこで逃げる二人の姉

妹。それを追う三人の騎士。

??? 「はあはあ、ネム走つて!!」

ネム 「お姉ちゃん！」

騎士A 「へへ、まちなあ」

騎士B 「逃げつた。無駄だぜえ」

騎士C 「とつとと、死になあ。」

そう言つて、騎士Cは切りかかり、姐の方は妹かばつて剣を受けて、騎士Aがどどめを刺そうとした時、仮面を付けた二人の人物が現れ：

「心臓掌握」
〔グラスプ・ハート
ホリソード〕

「光劍」

「弱、この程度で死ぬのか。」

????????????
「うむ、人を殺して何も感じない、やはり姿だけでなく、中身まで変わつてゐるなあ。」

??? 「ホントですねえ。人を殺しても、虫けらを踏み潰した感じですねえ。」

??? 「さて、女、子どもは、追い回せるのに毛色が変わつた相手は無理か？」

??? 「折角、だし実験に付き合えよ。」

そう言つて、騎士Bもあつさり殺された。

??? 「さてと、【中位アンデット作成】 デス・ナイト」 嫉妬マスク

そう言つて、デス・ナイトを作つたのはいいが作り方が死体に乗り移り、ドロつとした液体が大きくなり、右手にフランベルジュの剣、左にタワーシールドでぼろ布のマントのアンデットが出来上がつた。

??? 「じやあ。俺も【中位エンジェル作成】 エンジェル・ナイト」 白

いマスク

そう言つて、白い光が一つの死体を跡形もなく消えて、白い翼をした。騎士の天使が出来上がつた。

「（）の村を襲つてゐる。騎士を殺せ。」

デス・ナイト「ウオオオオオオオオオ

エンジエル・ナイト『畏まりました。主よ。』

デス・ナイトは雄叫び、エンジエル・ナイトは喋つて返答し、それぞれ走り、飛んで行つた。

「え、行つちゃつたよお。（守るべきものが主を置いくなよお。まあ、命令したのは俺だけどさあ）」嫉妬マスク

「おうおう、自由度、高いなあ（まあ、実験一環として見てみるか。）」白い仮面

「それより、大丈夫か？いや、ケガしているな。これを飲みなさい。回復のポーションだ。」白い仮面の人が言う

「は、はい。」

娘は恐る恐るポーションを飲んだ。すると傷はみるみるうちに治つていつた。

「嘘、治つた。」

「それは、良かつた。君たち名前は？」白い仮面

エンリ「は、はい。私はエンリ、こつちは妹のネムです。」

「うむ、どうか、君は魔法を知つてゐるかね。」嫉妬マスク

エンリ「はい、私の友人が薬師をしています。」

「どうか、なら話しあは早い、私たちのは魔法詠唱者だ。」

「生命拒否の繭、一矢守りの障壁《ウォール・オブ・プロテクション》

ンフォームアローズ』

???「その中に入つておれば無事だから、それとこれ上げる。これは、【ゴブリン将軍の角笛】と言つて吹けば君に従うべくゴブリンが現れるよ。もしもの時に使い。」

エンリ「あ、ありがとうございます。そ、それと厚かましいと思いまが父と母を助けてください。」

???「ああ、生きてたら助けよお。」

エンリ「そ、それとお二人のお名前は、何とおっしゃいますか。」

アゼルト「俺の名は、アゼルト・シーカス。」

モモンガ「わが名を覚えるがいい、わが名はAINZ・ウール・ゴウン。」

ドンツと音が鳴り、盾で騎士を吹つ飛ばした。デスナイトザンツと騎士たちを切り殺している。エンジエル・ナイト
天使とアンデットが協力して人間を狩つている光景だつた。

デス・ナイト「ウオオオオオオウウウウ」

エンジエル・ナイト『主から、お前たち騎士だけを殺せとの命令だ。』

天使から放たれた言葉で村人たちは、安否し、騎士はヘルムで見えないが顔を青ざめて絶望した。そこで一人騎士のベリユース隊長が叫んだ。

ベリユース「なななな、何故です。私が何をしたのです。いいいいい、命だけをお助けお。かかか、金ならあります。」

エンジエル・ナイト『村人を殺した。主はお怒りだ。だから貴様らを殺す。主の次の命令があるまで。それに貴様、見たいな、人間のクズは、今ここで殺す。』

エンジエル・ナイトはそう言つて、デス・ナイトがベリユースに近づいてきた。ベリユースは一人逃げようとしたが、エンジエル・ナイ

トがこう言つた。

エンジエル・ナイト『残りの騎士たちよ。今すぐそいつを捉えたら、命だけは助けてやろう。』

そう言われて、動こうとした。騎士たちに、もう一人の騎士が言った

ロンデス「騙されるな！あれは俺「ザンツ」たちーーー！？」

ロンデルは何が起こつたがわず首をはねられて死んだ。

エンジエル・ナイト『どうした？早くしないか。』

しかし、騎士が動く前にデス・ナイトが既に襲つてつた。

ベリユース「たじゆ、たじゆけて、おねがいします。なんでじまじゆ！」

エンジエル・ナイト『貴様、そう言つた。もの達の言葉に耳を傾けたか？貴様に慈悲などない。デス・ナイトにそのまま殺されると言いい。』

そう言つて、ベリユースはデス・ナイトにもてあそばれて死んでいった。残つた騎士に視線を向けた時に、

AINZ 「そこまでだ。デス・ナイト、エンジエル・ナイト」

AINZ 「やあ、初めまして諸君、私はAINZ・ウール・ゴウンと言う。大人しく武器を捨てるのなら、命は助けてやろう、しかし、まだ・・・」

ガシャン、ガシャンと次々に武器を捨てた。

アゼルト「どうやら、随分と疲れているようだな。」

AINZ「君たちには生きて飼い主に伝えるといい。次ここいらで騒ぎを犯したら、今度貴様らの国に死を運びに来ると行け、そして、我が名を伝えるのだ。」

そう言つて、騎士たちは逃げるよう而去つていったが、元からアゼルトには逃がせる気はなかつたので、自分の新たに召喚した天使にたので捕獲させた。

アゼルト「(ちよつと、モモンガさんそこは一人捕えておくでしょ。全員、逃がすから捕えましたよ。)」

AINZ「(すみません。ありがとうございます。後人前では、AINZでお願いします。)」

アゼルト「(分かつていますよ。)」

そうして、AINZたちは、村を救い、報酬の代わりに今の世界についての情報を聞いた。

第3話 陽光聖典

AINZたちが報酬代わりにこの世界のことについて聞いてアゼルトは情報を整理してた。

アゼルト「（情報を整理すると、この地図の左側がリ・エスティーゼ王国と右側がバハルス帝国があり、中央の山脈を挟むことによつて国土を分けている。その二国は仲が悪く城塞都市近くの平野で数年間争つてゐる。で、南方にある国家がスレイン法國と。良かつたあゝ騎士どもを捕虜にして、村長は盾の紋章からバハルス帝国の物つて言つてたけど、スレイン法國の偽装だつたかもしれないなあ）。まあ結果は後で聞こう。）」

AINZ「（良かつたあゝ。アゼルトさんが捕まえてくれて、後でお礼言つとこ。）」

そして、AINZとアゼルトが話を聞いて夕刻の時にある一団がこの村近づいてくるのを部下から連絡が来た。

アゼルト「どうしますか？」

AINZ「一樣、行つてみましよう。」

そう言つて2人は、その一団が来る方へといつてみると、そこに村長たちがおつた。

AINZ「どかされましたか。村長殿。」

村長「おお、AINZ様。シーカス様。実はこの村に馬に乗つた戦士風の者たちが近づいているそうで……」

AINZ「なるほど……」

アゼルト「お任せください。生き残つた者たちを村長殿家に至急集めてください。村長殿と私たちは広場でその一団が来るのを待ちましよう。」

そうして、少しすると武装に統一のない一団が我々の前ぐらに止まり、リーダー格の男が近づいてきた。

???「私は、リ・エスティーゼ王国、王国戦士長ガゼフ・ストロノーフ。ここ近隣を荒らしまわつてゐる。帝国の騎士たちを討伐するため王の御命令を受け、村々を回つてゐる。」

村長「王国戦士長・・・」

ガゼフ「この村の村長だな。その左右にいる者たちはいったい?」

AINZ「初めまして、王国戦士長殿、私はAINZ・ウール・ゴ

ウン。そして、」

AZELT「俺は、AZELT・シーカス、この村を襲っていた。騎士たちいたので始末したまでですよ。」

そう言つて、ガゼフは馬から降りてAINZたちに頭を下げお礼を言つた。

ガゼフ「この村を救つていただき、感謝の言葉もない。」

AZELT「いえいえ、それにまだ終わつてないですよ。」

ガゼフ「? それはいつたい。」

そこで、慌てた様子で兵士の人が突然來た。

兵A「戦士長! 周囲複数の人影。村を囲む形で接近しつつあります。」

「各員傾注」

????????「獲物は折に入つた。」

????????「汝らの信仰を神に捧げよ。」

彼らは、スレイン法國の神官長直属の特殊工作部隊郡、六色聖典の一つ、亜人の村を殲滅などを基本的任務として担当する部隊。陽光聖典である。その隊長ニグン・グリット・ルーアンは、部下から不安の声が聞いて笑つたりしなかつた。

部下A「・・・殺れますかね。」

ニグン「問題はない、あの男には王国の至宝を裝備していない。それに切り札はある。負けることはない。」

ニグン「では・・・作戦を開始する。」

彼らは知らない。この会話がAZELTの部下に全部、筒抜けに聞かれていると知らずに。

それから、周りを囲んでいる者たちの狙いはガゼフであることが分かつた。

アゼルト「（なるほど、王国の至宝を装備していかないから、ガゼフを狙つたのか。相手にしたら絶好のチャンスみたいなものか。）」

ガゼフ「ゴウン殿、シーカス殿、良かつたら、雇われないか？ 金なら臨んだ金額を払う。」

AINZ「お断りします。」

アゼルト「相方がそう言つてるし、無理だ。」

ガゼフ「そうか・・・ならせめてこの村にいる人たちを守つてはくれないだろうか。」

AINZ「ええ、それはお約束いたしましょう。この・・・AINZ・ウール・ゴウンの名にかけて。」

アゼルト「ああ。俺も一緒に守つておくぜ。」

ガゼフ「そうか感謝するゴウン殿。シーカス殿ならば後顧の憂いなし。私は前のみを見て進ませていただこう。」

AINZ「その前にこちらをお持ちください。」

ガゼフ「君からの品だ。ありがたく頂戴しよう。それでは、ゴウン殿、シーカス殿名残惜しいが私は行かせてもらう。」

そう言つて、ガゼフたちは馬を走らせていった。それからAINZとアゼルトを話し合いをしてた。

アゼルト「行っちゃつたね。ガゼフ殿」

AINZ「ああ、ここからは様子をみよう。もし相手を倒すのが無理だつたら、直ぐに引きましよう。」

アゼルト「その心配は要らないと思いますが、まあ様子を見て相手の情報を少しでも手に入れましょう。あ、それと部下から連絡で彼らは何か切り札を持つてるので、注意してください。」

AINZ「切り札ですか？ わかりました。注意しちゃいます。」

それから、ガゼフと陽光聖典の戦いが始まつて最初はガゼフ一人で戦うつもりだったが、逃げ切つた兵たちが戻ってきて戦いは乱戦になつた。相手は、炎の上位天使《アークエンジェル》でガゼフを襲うがガゼフは武技を使い天使たちを倒していくが相手はまた天使を召

喚した。そして、徐々に追い詰められていく。

ガゼフ「がああああ、なめるなああ。俺は、王国戦士長！この国を愛し、守護する者。この国を汚す貴様らに負けるわけにいくかああああ。」

ニグン「……そんな夢物語をかたるから、お前はここで死ぬのだ。ガゼフ・ストロノーフ。お前を殺した後残つた村人を殺す。無駄な足掻きを止め、そこで大人しく横になれ。せめてもの情けで苦痛なぐ殺してやる。」

ガゼフ「くっ・・・くく・・・・・く」

ニグン「何が可笑しい？」

ガゼフ「グゥツ、愚かなあの村には俺より強い御仁が二人おるぞ。」

ニグン「ハツタリカ。・・・・・天使たちよ、ガゼフ・ストロノーフを殺せ。」

―――そろそろ交代だな。

そう言つて、AINZたちは、ガゼフたちと入れ替わり、そして、草原に二人の仮面をした男たち現れた。

AINZ「初めまして、スレイン法國の皆さん私は、AINZ・ウール・ゴウン。そして、隣にあるのが私の友人」

アゼルト「アゼルト・シーカスだ。短い間だが覚えておいてくれ。」

AINZ「さて、最初に言つて、おきますが、あなた達では、私たちに勝つことはできません。」

ニグンは、眉をひそめた。スレイン法國でも上位に位置する者たちに向ける言葉ではない。

ニグン「無知とは哀れなものだ。その愚かさのつけを支払うことになる。」

アゼルト「ハハハ、その言葉そのまま返すぜ。たかだか第三位階魔法で召喚した。天使如きでどうやつて俺たちを殺すのだ。それに勝てるからここに現れたんだよ。」

ニグンは、さらに眉をひそめた。炎の上位天使『アーケンジエル』を雑魚と呼んだからだ。確かに一対一では負けるかもしれないが総数四十体の天使がいる。これを見て雑魚呼んだから相手は戦況すら

見抜けないバカと内心嘲笑つた。

AINZ「それに、お前たちはこのAINZ・ウール・ゴウンが手間をかけて助けた村人を殺すと宣言した。」

AZERL「これ程、不快なものはない。」

NGUN「不快とは大きく出たなあ、で、だからどうした。」

AINZ「大人しく命を差し出せ、そうすれば痛みはない。だが、」

AZERL「それを拒否した。その愚劣さの対価として絶望と苦痛を与えてから殺す。」

そう言つて、二人は柔らかい口調ではなくドスの入った声がをスレイン法國の皆にそう言つた。NGUNは、二人に得体の知れないものを感じ慌てて、隊員たちに命令を言つた。

NGUN「天使たちを突撃さよ。あの二人を殺せ。」

隊員たちも慌てて天使に二人を殺すよう命令したが、二体の天使はAINZに突撃して光の剣で刺したがまつたく効いてなく、もう一人の方には向かつて動こうとはしなかつた。

NGUN「何をしている!?、あいつにも天使で突撃させよ!」

隊員A「そ、それが命令をしているのですが、天使たちが一向に動きません。」

NGUNたちは、動搖しててた。普通、召喚したモンスターは召喚主の命令には絶対のはずなのに、それが何故。NGUNは、疑問に思つていた。

それもそのはず、元々天使リーズの魔法を作つたのは、AZERL本人で運営にそのシステムを譲る前から天使たちにはある細工を幾つかしていたのである。その内の一つに創造主には攻撃できぬのである。そんなことはNGUNに知る由もない。

AZERL「なんだ、俺には攻撃してこないのか。」ニヤツ（仮面してるから相手には見えない）

NGUN「くつ、全天使で突撃せよ。急げ。」

AINZ「やれやれ、お遊びが好きだなあ。AZERLさんちょっと離れていてください。」

AZERL「ん?、分かった。」

そう言つて、十二の漆黒の翼を展開して空高く上がつた。その光景を見たニグンたちは一瞬、驚愕した。

ニグン「なつ、だ、堕天使、い、いやその前に、そいつに集中攻撃だ。」

そして、天使たちは四方八方から突撃していくが、

AINZ 「負の爆裂《ネガティブバースト》」

AINZを中心にズンツと黒い波動が広がり、天使たちを消滅させた。ニグンは動搖してた。

ニグン「・・・あり、ありえない・・・」

ゾワリツ、ニグンはガゼフ・ストロノーフが言つてた言葉を思い出した。

ガゼフ『グウツ、愚かなあの村には俺より強い御仁が二人おるぞ。』ニグン部下は天使が聞かないから、自分の魔法でAINZに攻撃するがまつたく効かず、その内の一人が鉄のスリングを打つたが、そこにアゼルトが割つて入り鉄のスリングを受け止めた。

アゼルト「あのさあ、お前らこんな物で殺せると思つているのか。」シユツ、バチヤン

そう言つて、スリングを投げて投げた、相手の頭にヒットしてそのまま崩れ落ちた。

AINZ 「アゼルトさんあの程度攻撃で別に庇つてもらわなくても・・・」

アゼルト「別に庇つたわけではないですよ。あの程度攻撃ぐらい防げるぐらい知つてましたよ。ちょっと俺も交じりたかつただけですよ。それに、魔法が貧弱ですよ。」

AINZ 「ハツハツハ、それでは、彼らが失格ではないですか。なあ。」

ニグン「つ！ 監視の権天使、行け！」

AINZ 「やれやれ、本当に遊びが好きだなあ」

そして、監視の権天使はAINZに向かつて鈍器を振り下ろ

しだだ受け止められ、

AINZ 「獄炎」

そう言つて、吹けば消えるような黒い炎が放たれ、天使に付着する
と、全身を一瞬で覆い尽くす。

ニグン「あ、あ、ありえるかああああ。

ニグンは、発狂に近い声で叫んだ。

ニグン「たつた一つの魔法で上位天使を消滅するなど、ありえない
！」

隊員A「二、ニグン隊長、我々はどうしたら!?」

隊員にい言われて、ニグンは懐から、魔封じの水晶を取り出した。

ニグン「最高位天使を召喚する。」

隊員たち『おおう』

ニグンが最高位天使を召喚すると言つて、隊員たちは希望の灯が付
いた。

AINZ「アゼルトさんが言つてた、相手の切り札ですか？」

AZERLTON「そうみたいですね。最高位天使を召喚すると言つたし、
熾天使級《セラフクラス》だと思います。ので、俺がそいつを『墮天』
させてこちら側にします。」

AINZ「わかりました。お願ひします。」

そうしている内に、ニグンが持つている魔封じの水晶が光。

ニグン「見よ！最高位天使の尊き姿を！威光の主天使」
ドミニオン・オーソリティ

そして現れたのは光り輝く翼の集合体だつた。翼の塊の中から笏しゃく
を持つ手が生えている。顔や足などが一切ない、異様な外見であつ
た。

これを見たAINZとAZERLTON別の意味で驚愕した。

アインズ「こ、これが、最大の切り札だと!?」

アゼルト「おいおい!! 勘弁しろよ!!」

ニグンはアインズたちに驚愕に今まであつた不安が払拭されいく。

ニグン「そうだ！お前たちに使うほどの価値があると、判断した。恐ろしいか？」

アインズ「本当に・・・・」

アゼルト「まつたく・・・・」

アインズ・アゼルト「くだらん!!」

ニグン「な、何！」

それを聞いたニグンは驚いた。

アゼルト「この程度の天使に警戒してたとは、自分が恥ずかしいよ。すみません。アインズさんまさか、こんな天使だとは、わかりませんでした。」

アインズ「いえいえ、別に構いませんよ。しかし、これほどとは呆れましたね。あとは自分でします。試したい実験がありますので。」

アインズたちが最高位天使を前にして、馬鹿馬鹿しいと気配の濃い二人にニグンは吠えた。それがニグンたちには不安でしかなかった。ニグン「な、何故、最高位天使を前にして、そんな態度いられる。ありえん！ありえん！ハツタリだ！<善なる^{ホリースマイト}極撃>を放て!!」

そう言つて、ドミニオンは持つていた笏が壊れて、<善なる極撃>をアインズに放つた。しかし……

アインズ「ハハハハハ、これがダメージを追う感覚……痛みか。痛みの中でも思考は冷静であり、行動に支障はない。素晴らしい。またひとつ実験が終わつたな。」

アゼルト「なるほど。これがしたかつた実験ですか。それだと俺や他の人も思考は冷静でいられるみたいですね。」

AINZ 「さて、お遊びは終わりだ……絶望を知れ。（暗黒孔）」

ドミニオンの直ぐそばに、ポツンと小さな点が浮かび、見る見るうちに巨大な空虚な穴へと変わり、ドミニオンを吸い込んでいった。そこには何も残つてなかつた。

ニグン「お前たちは、いつたい何者だ。」

AINZ 「AINZ・ウール・ゴウンだよ。この名は、昔によく轟いていたよ。」

ビキキ

AINZがそう言う終わると空がヒビ割れしてすぐ戻つた。

ニグン「い、いつたい何が？」

アゼルト「どうやら、どこかのバカが俺たちのことを覗き見してたようだなあ。まあ、お前らの監視が一番可能性が高いだろなあ。それに俺の効果範囲内入つたから、対情報系魔法の攻性防壁が起動して。第九位階の魔法、〈核爆裂〉、〈ニュークリアエクスプロージョン〉の強化型を叩き込んだ。相当な被害出てると思うぜ。」

それを最後にニグンはAINZたちに命乞いをしたが、聞き入れてもらえずアッサリ捕まつて、氷結牢獄へと送られた。

そして、村に戻りガゼフに報告して、そのままナザリックへと戻つて、次の日に、今後のことについて皆と話し合いが行われた。

AINZ「さて今後のことについて話していくのだが、あのくもう

そんなに不機嫌にならないでくださいよ、龍牙さん、夜叉丸さん。」
2人が今だに、ムスつとしているのは、こんなに面白いイベントが発生したのに呼ばれなかつたことである。

夜叉丸「はあ、わかりましたよ。ギルド長。龍牙も、もういいだろ。」

龍牙「わつかたよ。話を進めてくれ」

そうして、会議が始まり、AINズとアゼルトが村を助けるところから、ニグンを捕獲するまでのことを話した。

ゼクス「うむ、そうなるとスレイン法國からの反撃があるかもしれませんなあ」

ハーデス「しかし、スレイン法國に核爆裂ニュークリア・エクスプロージョンを叩き込んだんじやろう」

ニルバ「たしかに、その魔法は強力ですし、向こうも国の再建に忙しいだろうと思う」

アゼルト「ああ、だから向こうは少数精銳の部隊でここ近辺に来るかもしねない。」

AINズ「心当たりもあるのですか？アゼルトさん」

アゼルト「ええ、丁度、サウンドウェーブから報告があつて、どうやら彼らは情報を流さないように頭に魔法が掛かつていまつたので、それを解除して情報を引き出しました。」

龍牙「その掛かつてた魔法は何だつたのだ？」

アゼルト「どうやら、3回質問すると死ぬ魔法だつた。」

夜叉丸「どんなことが分かつたのだ？」

アゼルト「さつき言つた。精銳部隊のことが分かつた。漆黒聖典と呼ばれている部隊で何でも一人一人がガゼフを超える連中だ。」

ゼクス「なるほど、その精銳部隊が来るかもしねないと言うことか」

アゼルト「ああ、何でも漆黒聖典のリーダーはプレイヤーの子孫らしい」

ハーデス「なんと！プレイヤーの子孫！」

ニルバ「たしかに厄介だね」

アゼルト「しかも、それだけではない。プレイヤーの子孫はもう一人おる」

龍牙「ほおゝ、プレイヤーの子孫が二人もおるのか」

夜叉丸「もう一人の方は、反撃に来ると思うか」

アゼルト「それはない。もう一人の方は国の切り札だ、そうだから出てこない可能性が高い」

龍牙「ちつ」

アゼルト「姐御。露骨にいやそうにしないでよお」

AINズ「では、その漆黒聖典については誰が対処しますか。」

龍牙・夜叉丸「私（俺）がやる」

ゼクス「アホ!!お前らが戦つたら、目立つだろうが!!ここは、俺と黒色軍^{ブラックナントバーズ}で対処する!!」

龍牙「おい!!ずるいぞ!!ゼクス!!」

夜叉丸「そうだぜ!!ゼクス!!」

AINズ「まあまあ、落ち着いてください。二人とも」

アゼルト「まあ、ゼクスの言う通りだなあ。漆黒聖典は裏で動く部隊。表立つて動かないからなあ、裏で片付けるのなら、ゼクスと黒色軍^{ブラックナントバーズ}が一番向いている。」

AINズ「では、漆黒聖典についてはゼクスでよろしいですか?二人とも」

龍牙「わかつた」

夜叉丸「いいだろう」

AINズ「では次に、冒険者は誰がいきますか?」

龍牙「私はいきたい」

夜叉丸「俺も」

ニルバ「僕も」

アゼルト「俺はバス」

ハーデス「ワシもだ」

AINズ「流石に3人はちょっと多い気がしますので、二人で残りはNPCでお願いします。」

夜叉丸「じゃあ、俺は降りるからNPCは俺の所から出してくれ」

AINZ「他の2人はそれでいいですか？」

龍牙「私はそれでいいぞ」

ニルバ「う、うん僕もそれでいいよ。（あつべ～これは龍牙と冒険者になるってこと。ひょっとしてミスった？）」

AINZ「では、冒険者は龍牙さんとニルバさんNPCは夜叉丸さんの方でよろしいでしようか。」

『異議なし!!』

そして、今後のことについて話し合つてそのことをNPCたちに話した。漆黒聖典については納得してもらつたが、冒険者についてはかなり反対されたの説得に時間が掛かつた。

それとNPCたちとも話し合いして、今後の方針についても決まつていった。